

船団

●第94号

特集Ⅱ 時めく野菜



会員作品



坪内 稔典

ミルトンは窓辺のあいつ青葉雨
いたどりのさみどりが好きでぶつちよも
ころがってげんげ畑の0番地^{ゼロ}
せんだんの花のむらさき湖光る
那美さんに君も会ったかみかん咲く
バラの名のトーマス氏とは僕である
青空に雲ひとつなし余り苗

中原 幸子

風光る背を向ける目を向けるどっち
虹渡る空中給油されている
ふれあうも遠くおもうもうすみどり
夕焼けて落ちたところのないコイン
若葉して飯食うてこの地獄耳
ぷちっぷちっ女の小嘘マスカット
ポリ塩化ビニールパイプ霜日和

火箱 ひろ

もう三日絶交中の土佐文旦
昆虫記十巻春の家百年
蕪村さん追伸牡丹の芽が三つ
げんげんの海に浮んでゐる僕ら
バラの芽やきようは強気な作田くん
はるばるとお花見にきて悩むなよ
春いくつ越えていつまでだんご虫

陽山 道子

卒業の子と買うシヨパンの楽譜
耳朶はピンクでぽっちゃり桜咲く
浮雲や彼の世にさくらありますか
元気でスキミにれんげの首かざり
草食系男子飛び歩く五月
蝶つれてあいつはやっぱりウソつきさ
春の夜の五つ転がす紙つづて



水のかたち

木村和也

一九四七年

霧吹きにつめ込んでいる春の水

男色という色もあり牡丹雪

天上は水がたくさん散るさくら

文鳥がすりつぶしている春の家

くだものを春の愁のように抱く

筆箱にしまわれている桜の実

麦秋の水傷ついて流れけり

空蟬のうつのかたちの真昼かな

水際にみずが来ている夜の秋

新涼やこと切れている蝶の羽

あちこちに水の昏さの星まつり

弁天町二百十日の背広売る

ポケットに胡桃の実ジャズ聴きにゆく

晩秋の子ども手をあげ道を来る

サーカスが終わり枯野が見えている

冬はじめ船につまれて象が来る

水鳥はみずのかたちを眠りおり

赤き実を沈めて寒の水となる

さようならとりあえず君雪になれ

木枯の生まれる朝の銀食器